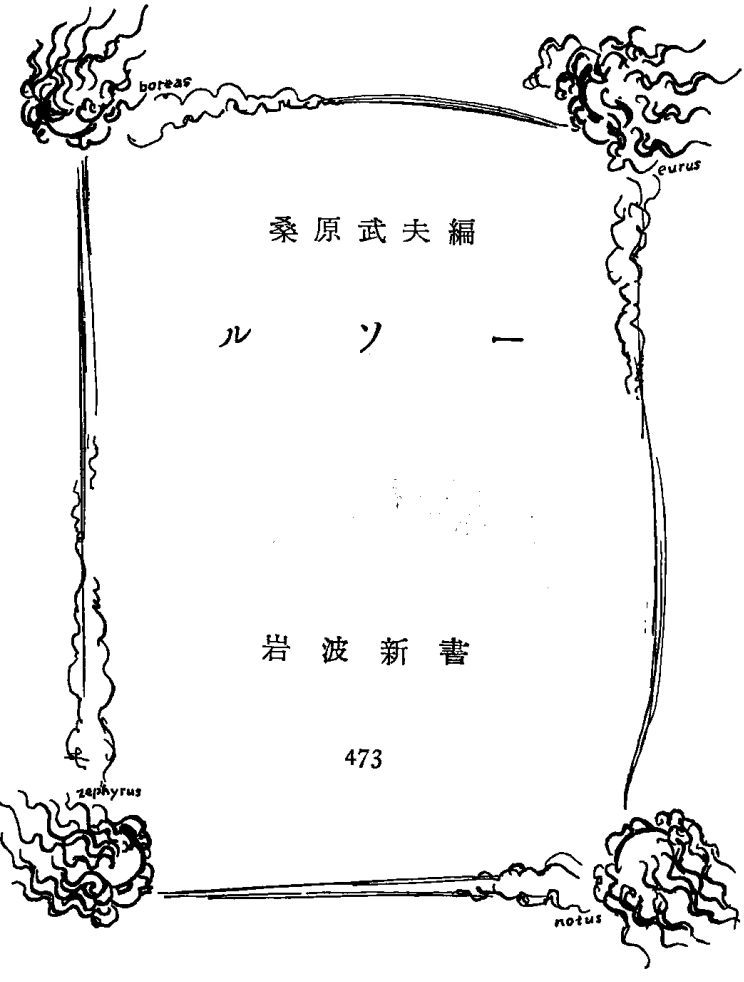
桑原武夫編

ルソー

岩波新書

C 23

185985
日文 701598628
山梨（科研）



桑原武夫編

ルソー

岩波新書

473

桑原武夫

1904—1988年
1928年京都大学文学部卒業
専攻—西洋文化史
著書—「文学入門」(岩波新書)
「フランス的ということ」
「ルソー研究」(編著)
「フランス革命の研究」(編著)ほか
訳書—アラン「芸術論集」
スタンダール「赤と黒」

ルソー　岩波新書(青版) 473

1962年12月20日　第1刷発行©
1989年5月15日　第36刷発行

定価はカバーに
表示してあります

編者　桑原武夫

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・理想社　製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN 4-00-412023-3

まえがき

今年は、ジャン＝ジャック・ルソーが生まれてから二五〇年、その二大作品『社会契約論』と『エミール』が出版されてから二〇〇年にあたる。

これを記念するための行事が世界各地でおこなわれたが、とくに彼の生まれたジュネーヴと彼が活動の中心としたパリにおいては、それぞれ「ジャン＝ジャック・ルソー協会」とユネスコ・フランス国内委員会の主催によって、盛大なルソー学会がひらかれた。わたしは、後者においてささやかな啓蒙的報告をおこなうために、招かれて参加したので、世界各国から集った、それぞれ思想的立場を異にする学者たちによる、さまざまの側面からのルソーについての研究発表をきくことができた。

六日間にわたる発表と討論を傾聴しおわってのわたしの率直な印象は、しかし、それらのすべてをもってしても、この巨大な人間はついにおおいえなかったということである。学者たちの考究が不十分だったというのではない。ルソーが一八世紀に提出した問題、彼の存在そのも

のをもって示した問題は、こんにちもまだ結着がついていないからのことである。同時に、わたしたちが一一年前にこころみた『ルソー研究』は、当時として可能な範囲の努力をしたつもりではあったが、なお考えの浅かった点があることを反省させられた。

ルソーについての一般向きの教養書を岩波新書として書くように頼まれたのは、その共同研究を出版した直後のことであった。わたしは多忙にまぎれて、その約束をはたすことを怠っていたのだが、生誕二五〇年を記念して、今年こそは実現せねばならぬと考えた。そこでさきの共同研究の参加者であった河野健二、樋口謹一、多田道太郎の三氏とともに構想を考えた。そのうちに桑原の渡欧が決定して時間的余裕がとぼしくなったので、およそ決定されたプランにしたがって、1・2と7の時代の部分は河野、3・4と7の生涯の部分は樋口、5・6は多田、8は桑原が、それぞれ分担執筆し、相互検討ののち、桑原が全般にわたって修正、加筆することとして、本書が成立した。

学者や芸術家の価値は究極において、その作品によって定まる。作品が時代と作家の個人生活によって規制されることはいうまでもないが、作品がまずわたしたちを捉えるのでなければ、作者の伝記や社会背景は魅力なき考証にすぎまい。とくにルソーは今日も生きているというのが、わたしたちの立場である。そこでまず1から6までで、ルソーの仕事の内容をいささか今

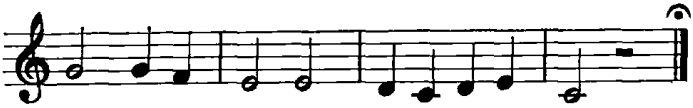
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

日的な評価をくわえつつ明らかにしようとした。彼の仕事に意義をみとめ、興味をいだかれた上で、7ないし8に読みすすまれることを希望したいのである。

本文中のルソーからの引用文は、げんに問題としている作品については一々その名をあげず（たとえば、1において『学問芸術論』を紹介するさいは、その書名を附記しない）、彼の他の作品からの引用についてのみ、その書名を示しておいた。7は主として『告白』をふまえているので、一々出典をしるさなかった。なお、引用の訳文は岩波文庫版によることを原則とした（『人間不平等起源論』『新エロイーズ』『社会契約論』『孤独な散歩者の夢想』）。ただ『学問芸術論』と『告白』は目下同文庫で新訳が準備中なので、一部はその草稿によったが、既存の諸訳本を利用させてもらったところもある。以上すべてにおいて、引用のさい若干の修正を加えたことと共に諸訳者のお許しをねがいたい。

一九六二年一一月九日、京都において「ルソー生誕二五〇年記念講演会」をひらいた夜

桑原武夫



目次

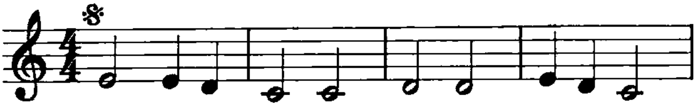
まえがき

1 不平等とのたたかい……1

2 直接民主主義……21

3 人間の教育……43

4 理性と感情……65



5 自然のよろこび……87

6 孤独者の意味……107

7 ルソーの時代と生涯……127

8 世界への浸透……175

ルソー略年譜……巻頭

ルソー関係地図……巻末

1 不平等とのたたかい

ルソー生誕 250 年記念切手

一七四九年、パリの東南三〇〇キロのところにある地方都市ディジョンのアカデミは、つぎの題目で懸賞論文を募集した。「学問と芸術の復興は、習俗を純化させるのに役立ったかどうか。」送られてきた応募作品の数は一三。翌一七五〇年、当選として発表されたのは、当時まだ無名のジャン＝ジャック・ルソーの作品、学問・芸術の役割に否定的なものであった。

『学問芸術論』の懸賞当選

このとき、ルソーは三八歳。ジュネーヴで少年時代を送り、南フランスの田園で青年時代をすごした彼は、パリに出てすでに数年、テレーズと同棲し、哲学者ディドロやグリムと交わり、歌劇の作曲に熱中していた。『学問芸術論』として有名になったこの懸賞論文(「第一論文」といわれる)が書かれたについては、ヴァンセンヌの牢獄につながれていたディドロとのあいだのいきさつがある。ルソーは、親友ディドロを慰問するためにヴァンセンヌへおもむく途中で、突然インスピレイションをえて、その旨をディドロに話し、懸賞論文のことを相談した。この相談の内容が、どのようなものであったかについては、ディドロとルソーの記憶がくいちがっており、ディドロは学問・芸術は習俗を純化させないという否定的結論を教えたのは自分であって、ルソーのはじめの意見は肯定にかたむいていたといっているが、それは必ずしも正当で

はあるまい。ルソーの他の著作と比較してみて、この論文だけが他人の意見にしたがって書かれたという証拠はないからである。それはともかく、『学問芸術論』のなかみをうかがうことにしよう。

「精神は、肉体と同じく、みずからの欲求をもっている。肉体の欲求が社会の基礎をなし、精神の欲求が社会の楽しみの基礎をなす。政府や法律は、人間集団の安全と幸福をはかるものであるが、学問・文学・芸術は、これらに比べて圧制の度合いは少ないにしても、一層強い力をもっていて、げんに人間たちがつながれている鉄鎖の上に花飾りをひろげ、人々がそのために生まれたといえる根源的な自由の感情を抑圧し、奴隷状態を好ませ、そして文明国民とよばれるものをつくり上げる。」ここに『学問芸術論』の基本テーマが述べられている。つまり、学問や芸術という「文明」の産物は、人間の「欲求」または「欲望」がつくり出したものであり、それは人間の本来的な「自由」や「道徳」と矛盾するものであるという主張である。

文明社会の欺瞞

ルソーは、力づよくまた雄弁に、学問・芸術の発達を批判する。学問・芸術が人々に奴隷状態を好ませるという主張は、つぎのように説明される。「君主たちは、貨幣の輸出を結果しないかぎり、快い芸術やぜいたくの趣味が臣下のあいだでひろがることをつねによろこびの眼で眺める。なぜなら、君主はこうして臣民に、奴隷化に好都合な卑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

小な魂をそだてることのほかに、人民がふけるあらゆる欲望が、それだけ彼らをしばりつける鉄鎖となることを十分に承知しているからである。」

ここに、すでに後年のするどい政治批判の眼が用意されている。社会の現象をそのままのかたちで受け取るのではなくて、「表面的な秩序」のほかに「真の秩序」というものがあり、両者は矛盾するものだという認識は、すでに『学問芸術論』の数年前にルソーの頭のなかに生まれていた。とくに、ヴェネチア駐在のフランス大使の秘書としての一年間の経験が、こういう認識を助長した。ルソーは大使の横暴に腹をたてて秘書の職をすてて抗議したが、いれられなかった。「わたしの告訴が正しいのに無効となったことは、ばかばかしい社会制度にたいする義憤の芽ばえをわたしの心に植えつけた。この制度では、真の民福と真の正義とは、つねに漠然とした表面的な秩序のぎせいとなるのである。表面的な秩序とは、すなわちあらゆる真の秩序を破壊するものであり、かつ弱者の抑圧と強者の横暴にたいして公けの権力の認証をあたえるものにすぎない」(『告白』)。『学問芸術論』の表現をつかえば、「ただ一つの美徳ももつことなしに、あらゆる美徳の外観をもつ」ようになるのが「文明国民」だということになる。

『学問芸術論』の論理は、ルソー自身が晩年になって認めたように、必ずしも一貫していない。はじめのうち、ルソーは学問・芸術を直接攻撃しないで、からめ手から攻める戦法をとっ

ている。つまり、悪の根源は学問・芸術ではなくて、人間の欲望にある。欲望の産物である「政府と法律」または「王の地位」の高まりによって、人民が抑圧されるのを助け、強化するものとして学問・芸術の役割があるとした。「欲求が王の地位を高め、学問・芸術がそれを強固なものとした。」ついで、ルソーは、学問・芸術の発展と、道徳の頽廃とのあいだに平行現象のあることを主張する。「われわれの学問・芸術が完成に向って前進すればするほど、われわれの魂は腐敗した。」「学問・芸術の光が地平にのぼるにつれて、美徳が消えてゆくのが見られる。これと同じ現象は、あらゆる時代、あらゆる場所において見られた。」

未開人の幸福

「あらゆる時代、あらゆる場所」のうち、ルソーが理想としたものは、もちろん文明国民ではなくて、原始未開の民族または粗野な農民であった。初期のペルシア人、スキタイ人、ゲルマン人、アメリカの未開人、スパルタや初期のローマの住民などは、いずれも無知ではあったが、道徳にかけるところはなかった。「おお、スパルタ！　役に立たぬ理論にとっての永遠の恥辱！　芸術のおかした悪がひとまとめにアテネに導入され、僭主(ピシストラト)があれほど苦労して詩人の王(ホメロス)の作品を集めていたあいだに、お前(スパルタ)は芸術と芸術家、学問と学者を城壁の外へ追い出したのだ。」アテネは高尚な趣味や哲学者を生み、大理石や織物をつくったが、スパルタはそうしたものをもたなかった。しか

し「そこでは人々は有徳な者として生まれ、国の空気そのものが美徳を行きわたらせる。」またいう。「肉体の力や強さが見出されるのは、農夫の粗野な衣服のなかであって、廷臣の金ぴか衣裳のなかではない。魂の力や強さにほかならぬ美徳もまた、装飾とはかかわりをもたない。」

叙述がすすむにつれて、ルソーは学問・芸術そのものの攻撃にうつる。それらは無益な装飾であるにとどまらないで、悪の根源いな悪そのものと評価される。「ローマ人は、美徳を実践するだけに満足していたが、彼らが美徳を研究しはじめると、すべての美徳は失われてしまった。」学ぶこと、趣味をみがくことが、すでに悪である。なぜ、そうなのか。彼はいう。「天文学は迷信から生まれ、雄弁は野心、憎悪、へつらい、虚偽から生まれ、幾何学は貪欲から、物理学は無益な好奇心から生まれた。」つまり、学問はその起源において、人間の悪徳に基礎をおいている。それだけではない。学問・芸術は、人間のあいだに奢侈や不正があることを肯定し、それと結びつくものである。「芸術をやしない育てる奢侈がなかったならば、一体、芸術はどうなるか。人間の不正がなかったら、法律学は何の役に立つだろうか。暴君や戦争や陰謀家がなかったら、歴史学はどんなものになるだろうか。」さいごに、学問はその結果においても有害である。それはまず、時間の浪費である。「無為のなかに生まれた学問が、こんどは無為をはぐくむ。そして、とり返しのつかない時間の浪費こそ、学問が社会にあたえる第一の害である。」第

二の害は、奢侈である。「奢侈は、学問・芸術なしに増進することはまれであり、学問・芸術は奢侈なしには決して進まない。」

学問・芸術は追放すべきか

すでに知りえたように、学問・芸術の批判は、美徳と素朴さの讃美である。「昔の政治家たちは、たえず習俗と美徳について語った。現代の政治家は、商業と金銭のことしか語らない。」ここに、ルソーの時代観があらわれている。すなわち「商業と金銭」、その源泉としての奢侈、ここに彼は文明社会の不幸を見出す。「生活用品が多くなり、芸術が完成し、また奢侈がひろがる一方、真の勇気はおとろえ、いくさの美徳は消滅する。しかも、それは小部屋の暗がりのなかで作られる学問やすべての芸術のしわざである。」彼の時代批判は、さらに進んで人間のあいだの不平等の問題を認めるところにまで達する。いうまでもなく、これは後の著作『人間不平等起源論』(以下『不平等起源論』と略す)につながるものである。彼はいう。「すべての悪習は、才能の差別と美徳の堕落によって、人間のなかに導き入れられた有害な不平等以外のどこから生まれてくるだろうか。これこそ、われわれのあらゆる学問研究の最も明白な産物であり、学問研究のあらゆる結果のなかでもっとも危険なものである。」これに対比されるものは、不平等のもとにある人民の運命である。「われわれは物理学者、幾何学者、化学者、天文学者、詩人、音楽家、画家をもっているが、もはや市民

をもたない。あるいは、まだ市民がいるとしても、へんぴな田舎にちらばって、貧しく、さげすまれて死んでゆく。これがわれわれにパンをあたえ、われわれの子どもに牛乳をあたえる人人のおちいっている状況であり、彼らがわれわれに抱いている感情である。」

では、どういう対策を用意すべきか。彼は、印刷術については追放を主張している。しかし、学問や学者はどうか。書物を焼き、図書館をこわし、学者を追放すべきだろうか。「ベーコン、デカルト、ニュートンのような人たち、これらの人類の教師たちは、決して先生なるものをもたなかった。」偉大な学者は、自分ひとりの力で学問を開拓したのであって、書物や教師によって教えられたのではない。だから、そういう天才にだけは学問研究を許しても害は少ない。「もし学問・芸術の研究にしたがうことを、若干の人たちに認めねばならないとしたら、それは巨匠のあとを独力でたどり進み、彼らを追いこす力を自覚している人々にたいしてだけである。すなわち、人間精神の栄誉のために、記念碑をうち立てることを義務とする少数の人々にたいしてだけである。」

この対策は、学問・芸術そのものを悪とした立場からすると、首尾一貫しない。結論にいたって、ルソーは穏健になり、妥協的になる。しかし、論文のはじめに彼が述べた言葉、「わたしは決して学問の悪口をいうつもりはない。わたしが有徳の人々の前で弁護するものは、美徳で

ある」という立場からすれば、彼の結論は一貫しているといえるだろう。

さいごに彼はつぎのように美徳をたたえる。そして、これこそはルソーの真情であり、彼が生涯守りとおした立場である。「おお、美徳よ！ 素朴な魂の崇高な学問よ！ お前を知るには、多くの苦労と道具が必要だろうか。お前の原則は、すべての人の心のなかに刻みこまれてはいないのか。お前のおきてを学ぶには、自分自身のなかにかえり、情念をしずめて、自分の良心の声に耳を傾けるだけで十分ではないのか。ここにこそ、真の哲学がある。それに満足することを知ろうではないか。」

論戦による名声

『学問芸術論』の当選は、ジュネーヴ生まれの貧しい哲学者を一躍パリの有名文士とした。しかし、彼は名声の上るのをてばなしで喜びはしなかった。逆に彼は名声に背を向けて、「独立と貧困のなかで暮らし」、みずからに「奢侈を禁ずる」生活をしようと、「自己革命」を決意する(『告白』)。『学問芸術論』で書いたとおりを実践しようとしたのである。しかし、世間はそれを認めなかった。彼の作曲した歌劇『村の占者』が人気を博して、国王の前で上演されたのも、また彼が職業として始めた楽譜筆写の註文が多かったのも、名声の結果であった。それだけではない。多くの名士がルソーの特異な主張にたいして反論を書き、そのことによって一層彼を有名にした。まず、ポーランド王スタニスラスは、学問を擁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong